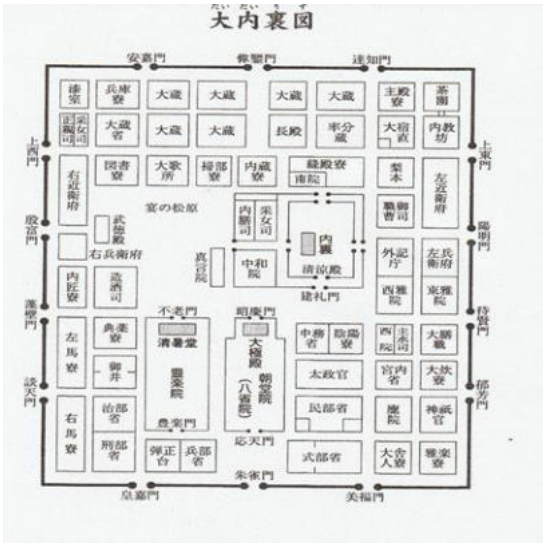


**(第3回) 応天門の変の真犯人は？
の回答**



応天門（おうてんもん）とは、大内裏の南にある門の名前です。大内裏とは平安京の宮城のことで、平安京では東西約 1164 メートル、南北約 1394 メートルで、京の北部中央に位置し、大垣に囲まれて四面に宮城門があり、南北面には各 3、東西面には各 4、計 14 の宮城門が開いていました。入ると内部には天皇の住む内裏、正庁の朝堂院、諸官衙(かんが)がありました。正門である朱雀門を入ると広場がありその正面に応天門がありました。これを入ると朝堂院があり、奥に正殿の大極殿(だいごくでん)がありました。内裏は朝堂院の北東方にあり、南寄りに紫宸殿など公的な建物が並び、北側に清涼(せいりょう)殿などの天皇の私的な殿舎があり、各殿舎は廊で結ばれていま

した。太政官などの主要な官衙が朝堂院の東に、大蔵省関係が大内裏北部にありました。なお、朝堂院などは 1177 年、内裏は 1227 年に焼亡したのちは再建されませんでした。

さて応天門の変は、平安時代前期の清和天皇の貞観 8 年（866 年）に応天門が放火された事件でした。この当時東日本では火山が噴火し、東北で十和田湖ができたり、11 年前の東日本大震災に匹敵する大地震や巨大津波が起り、全国的に被災や飢饉が蔓延し、京の都では疫病が大流行するなど政情不安な時代でした。その中で応天門の変も宮中の勢力争いを反映した複雑な政治事件となりました。当初、放火犯として大納言・伴善男は左大臣・源信の犯行だと告発しましたが、太政大臣・藤原良房の進言により源信は無罪となりました。しかしその後密告があり今度は伴善男父子に嫌疑がかけられ、有罪となり流刑に処されました。放火の真犯人は不明ですが、この事件は古代からの名族大伴氏没落の一方で藤原良房の一族が摂関家として朝廷に勢力を伸ばすきっかけとなりました。下図は事件の顛末を画いた『伴大納言絵詞』中の炎上する応天門と、それを見物する都の人達を描いたものです。

シンビオ社会研究会の

ホームページは [こちら](#) →



次号 No. 5 発行予定：令和 4 年 9 月頃

